

園芸福祉農園における心身リハビリテーションガーデンプログラムの開発及び実証



石井 麻有子 氏

千葉大学環境健康フィールド科学センター

要旨

園芸福祉ファーム「お〜い船形」は、野菜栽培による高齢者、知的・身体障害者の雇用の確保と野菜の生産活動による地産地消の経済活動を実施してきた。今後、介護予防と要支援高齢者に対する生活支援への一体的な運営へ向け、野菜栽培作業を通じた心身の機能維持及び機能回復へ向けた効率的・効果的な介護予防策として、これまで生産活動と人的交流及び生きがいの場が目的であった活動を見直し、科学的な運動作業療法を取り入れることを検討した。スウェーデン農業科学大学で実施のNature Based Rehabilitation (NBR)の理論を用いたリハビリテーションガーデン作りとプログラムの開発を3年計画で行うことになり、初年度は場所作りに特化した。そのための農作業検証、ワークショップ、高齢者施設視察を行った。その結果、農作業は、高齢者にはかなり負荷がかかる作業であることを認識し、ワークショップでは、場所を作る際に必要な事柄を参加者の意見から取り入れ計画を進めた。また、高齢者施設の視察による現状把握、プログラム開発のための初期段階の情報を得ることができた。高齢者ボランティアはガーデンの施工を行うことで使命感や達成感の充足等のポジティブな印象が見受けられた。場所作りに関しては、さらに適したものができるよう施工を続け、検証の場としてクオリティを追求し、後継の人材の確保及び運営側の人材育成も今後着手していく必要がある。

1.背景と目的

千葉県北西地域にて、特定非営利活動法人「NPO支援センターちば」と園芸福祉ファーム「お〜い船形」は、野田市、野田市障害者団体連絡会、野田市社会福祉協議会、生活協同組合パルシステム千葉との連携によって、園芸福祉農園での野菜栽培による高齢者、知的・身体障害者の雇用の確保と野菜の生産活動による地産地消の経済活動を実施してきた。今後、介護予防と要支援高齢者に対する生活支援への一体的な運営へ向け要支援高齢者の社会参加、生きがい活動の推進と介護予防を通じた生活支援サービス等の基盤となる活動へと進化させ、野菜栽培作業を通じた心身の機能維持及び機能回復へ向けた効率的・効果的な介護予防策として、園芸福祉農園での高齢者の生きがい活動の場とすることを目的とした。

2.方法

これまで活動内容の主体は野菜生産活動と人的交流が

中心であったが、更に科学的な根拠に基づいた療法の検討を試みた。私は、これまでスウェーデン農業科学大学(以下SLU)のパトリック・グラン教授が提唱するNBRの理論を用いたリハビリテーションガーデンプログラムを研究してきた。その演習や実施施設での経験を活かし介護予防を推進する観点から、園芸福祉農園の自然環境を活かしたリハビリテーションガーデン(以下リハビリガーデン)の場作り及びプログラムの開発及び実証を行った。

3.活動の概要

(1)農作業の検証

ア.ヒアリングおよび行動観察からの考察

農作業は、中腰やしやがむなどの姿勢が多く、身体が健康でなければ継続は難しいことを認識した。しかし、野菜を育てる、収穫する等から得られる満足感是非常に高く、身体が動く限り続けている高齢者が多

い。土に親しんだ世代のQOLを充たす方法として有益だと考えられた。一方、身体が不自由な高齢者の場合は、負担、介護者との動きを考慮した場を作る必要がある。

(2)「リハビリガーデン」づくりワークショップ

プランニング：飯島氏(お〜い船形)、唐崎氏(農研機構)、石井(千葉大学)

主な参加者：農研機構、お〜い船形管理者及び促進隊、NPO支援センターちば、生活介護ステーションエルのだ、千葉大学大学院生

ア.第1回ワークショップ(2014年8月6日)

- ・高齢者にやさしい空間にするために
- ・収穫体験
- ・短・中期での活動計画の立案

イ.第2回ワークショップ(10月15日)

- ・リハビリガーデンの現地視察により現状を確認
- ・リハビリガーデンについて説明
- ・スウェーデン視察の報告

ウ.第3回ワークショップ(11月26日)

- ・SLUのパトリック・グラン教授による現地農場視察
- ・飯島氏からのコンセプト及び活動内容の説明
- ・パトリック・グラン教授からSLUで実施のリハビリガーデンの理念、運営体制、現在のプロジェクトの説明あり
- ・リハビリガーデン改善への指摘あり

(3)国内外高齢者施設への視察

ア.スウェーデンの事例

①スコーネ地方ルンド市(8月16日~28日)

- ・Thulehem(ルンド市郊外)

1963年創立の元気な高齢者が暮らす高齢者住宅、通常の日常生活が送れる。敷地は広く、アクティビティが充実、楽しく健康に暮らすことに特化。予防医療センターもある。

- ・Brunnslyckan(ルンド市中心部付近)

ルンド市運営の認知症高齢者のための高齢者施設、看護師は24時間対応可能。アクセスのよい庭園がある。入居棟はニーズによって選ぶことが出来る。

- ・Ribbingska Huset(ルンド市中心部付近)

1915年に作られた国内で最も古い特別養護老人ホームの一つ。

建物の老朽化により外観はそのままで内部を改築。現在は賃貸マンション。高齢者施設は、同じ敷地内の現代的な建物に移動。施設の近くに小さな庭があり介護者と一緒に楽しむ光景が見られた。

②スコーネ地方フー市(3月20日)

- ・Kungshällan

フー市が運営する高齢者施設、駅から徒歩数分圏内にある。施設内のイベント、ランチなど近隣在宅の高齢者も利用可、同じ市に住む住民も多数ボランティアとして参加、小さな庭のなかに道具入れと一体化したレイズドベッドがあり工夫されていた。

イ.日本の事例

①千葉県野田市(11月26日)

- ・デイケア施設「生活介護ステーションエルのだ指定居宅介護支援事業所」。市街地の一般的な例として小規模の施設を見学。パトリック・グラン教授には日本の高齢者施設の多くは余裕のある自然空間を持つことが難しいという認識を持っていただいた。

②茨城県稲敷郡阿見町(11月26日)

- ・「住宅型有料老人ホームグランヒルズ阿見」。郊外型の例として見学。医療体制や住環境が充実しており、色彩を効果的に使い明るい印象。周辺に自然は多いが建物の中には入居者が使うことのできる庭はなく関連クリニックの平野院長は入居者のQOLのためにも将来的に敷地内の空き地を庭の創出に転用することも考えているようだ。

(4)リハビリガーデン作り

リハビリガーデンの施工は、高齢者が使用する視点により、SLUのリハビリガーデンのデッキを参考に促進隊の方々が積極的に施工を実施した。農場の一面を使い現在もデッキ、レイズドベッド、車椅子の車輪が入るテーブル、花壇を施工中である。デッキまでのアクセス経路の整備が、今後の課題である。

4. 今後の計画と課題

本計画は3年計画の初年度であり場作りに重点を置いた。その結果、簡単な園芸作業であれば可能などころまで施工した。促進隊の方々はこの施工での使命感が達成感につながったように見受けられた。他者が喜び感謝することで自らも満たされるのが日本人の特徴の一つとも思える。このような要素を盛り込んだプログラム作りも検討の余地がある。

最後に本プロジェクトにご協力いただいた杉浦地域医療振興財団、唐崎氏(農研機構)、飯島氏と促進隊の皆さま(お〜い船形)、千葉大学関係者各位、ケアマネージャーの打越氏には本当に感謝の念が尽きない。リハビリガーデンはさらに使用ができるように施工を続け、検証の場としてクオリティの向上を求め、後継の人材の確保や運営側の人材育成も今後、着手していく必要がある。